小 汐 手 遺 跡

浦ヶ部地区住宅団地造成事業予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 2

黒井田小林遺跡

わらび谷地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999年3月

安来市教育委員会

安来市は島根県東端部に位置し、民謡安来節とハガネのまちとして知られていますが、県下でも有数の埋蔵文化財が数多く所在するところでもあります。

さて、本市では、昨年度の安来道路開通、それに伴う市内道路網の整備、人口定住化にむけての住宅団地建設など多くの事業が計画されました。同時に多くの埋蔵文化財調査も行われました。この報告書は平成8年度に調査を行った小汐手遺跡、平成10年度に調査を行った黒井田小林遺跡の2遺跡のものです。

調査の結果、小汐手遺跡では弥生時代後期から古墳時代の小集落の跡や旧石器時代の削器などの貴重な遺物が発見されました。黒井田小林遺跡からは弥生時代から古墳時代にかけての住居跡が検出されました。こうした発掘調査の成果は、当時の人々の生活の一端をうかがわせるものであると同時に、現代を生きる我々に何らかの形での示唆を与えてくれるものであると思われます。

本報告書が、安来市内の歴史を理解するための一助となり、また広く一般の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるうえで役立てば幸いです。

なお、発掘調査及び本書の刊行にあたりましては、安来市都市開発課・わらび谷 土地区画整理組合をはじめ、各方面からご支援、ご協力をいただきましたことに対 し、厚く御礼申し上げますとともに、今後も文化財行政に一層のご援助を賜ります ようお願い申しあげます。

平成 11 年 3 月

安来市教育委員会 教育長 市 川 博 史

- 1. 本書は、安来市教育委員会が調査を実施した安来市浦ヶ部地区住宅団地造成とわらび谷地区土 地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2. 本書で扱う遺跡は次のとおりである。

(安来市浦ヶ部地区住宅団地造成事業・安来市黒井田町字小汐手ほか) 小汐手遺跡 黒井田小林遺跡(わらび谷地区土地区画整理事業・安来市黒井田町字小林)

3. 調査組織は次のとおりである。

小 汐 手 遺 跡 (平成8年4月~平成9年3月)

調查主体 安来市教育委員会

事務局 市川博史(教育長)、川井章弘→長瀬博美(文化振興課長)、

永見 英(文化係主任→同係長)、堀江候司(文化係主事)

田中義昭(島根大学法文学部教授) 調査指導

徳岡隆夫(島根大学理工学部教授)

調査員 永見 英、大塚 充(臨時職員→同主事補)

水口晶郎 (臨時職員→同主事補)、金山尚志 (同主事)

丹羽野裕(島根県埋蔵文化財調査センター) 調査協力

中村唯史(島根大学理工学部大学院生)

松本明子、永田みづえ、安達裕子、泉あかね、中山和美 遺物整理

黒 井 田 小 林 遺 跡 (平成10年10月~11月)

安来市教育委員会 調查主体

事務局 市川博史(教育長)、成相二郎(文化振興課長)、

廣江奈智雄(文化係長)、堀江候司(同主任主事)

調 査 員 水口晶郎(文化係主事)、金山尚志(同主事)、大塚 充(同主事)

遺物整理 安達裕子、泉あかね、中山和美、山内英樹

- 4. 現地調査及び資料整理については、上記の調査指導・協力の諸氏の他、門脇等玄(安来市文 化財保護員会)、東森市良(同)、野津弘雄(同)、池渕俊一(島根県埋蔵文化財調査センター) の各氏にご助言とご協力をいただいた。
- 5. 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

小汐手遺跡

SI(竪穴住居跡) SD(溝状遺構)

黒井田小林遺跡

- SI(竪穴住居跡) SB(掘立柱建物跡) SX(性格不明土壙)

SD (溝状遺構) P (ピット)

- 6. 出土遺物及び調査記録資料については、安来市教育委員会で保管している。
- 7. 本書の挿図中の方位は磁北を指す。
- 8. 本書の編集執筆は大塚、水口が行った。文責は目次欄に明記している。

目 次

第1章(立置と環境(大塚 充)	1
第2章 /	♪汐手遺跡の調査 ⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯ (大塚 充)⋯⋯⋯	3
第11	節 調査に至る経緯	3
第 2 章	節 調査の経過	3
第 3 章	節 調査の概要	4
第4章	節 調査の結果	5
第 5 章	節 まとめ	9
第3章 第	黒井田小林遺跡の調査(水口晶郎) 2	0
第11	節 調査の経緯と経過	0
第 1 章 第 2 章		
	節 I区の調査2	1
第 2 1	節 I区の調査 ····································	1 5
第 2 章	節 I区の調査	1 5

挿 図 目 次

	小 汐 手 遺 跡	第 20 図	Ⅱ区加工段5実測図(1:60)
第 1 図	周辺の遺跡位置図(1:25,000)	第 21 図	Ⅱ区加工段5出土遺物実測図(1:3)
第 2 図	調査区配置図 (1:1,000)	第 22 図	Ⅱ区加工段6実測図(1:60)
第 3 図	調査後地形測量図(1:1,000)	第 23 図	水田トレンチセクション図(1:40)
第 4 図	I区SI01出土遺物実測図(1:3)	第 24 図	水田トレンチ出土遺物実測図(1:3)
第 5 図	I区SI01·SD01実測図(1:60)	第 25 図	遺構に伴わない遺物実測図(1:3)
第 6 図	I区SI02·03出土遺物実測図(1:3)		黒 井 田 小 林 遺 跡
第 7 図	I区SD01実測図(1:60)	第 26 図	調査区位置図(1:1,000)
第 8 図	I区SI02·03実測図(1:60)	第 27 図	I 区遺構配置図 (1:100)
第 9 図	I区SD01出土遺物実測図(1:3)	第 28 図	SI01実測図(1:60)
第 10 図	Ⅱ区SI01出土遺物実測図(1:3)	第 29 図	SI01出土遺物実測図 (1:3)
第 11 図	Ⅱ区SI01実測図(1:60)	第 30 図	SB01~03実測図(1:60)
第 12 図	Ⅱ区SI02出土遺物実測図(1:3)	第 31 図	SB04 実測図(1:60)
第 13 図	Ⅱ区SI02実測図(1:60)	第 32 図	SB01~03 覆土中出土遺物実測図(1:3)
第 14 図	Ⅱ区SI03実測図(1:60)	第 33 図	SK01 実測図(1:60)
第 15 図	Ⅱ区SI03出土遺物実測図(1:3)	第 34 図	SK01•02 出土遺物実測図(1:3)
第 16 図	Ⅱ区加工段 1•2 実測図 (1:60)	第 35 図	SK02 実測図(1:60)
第 17 図	Ⅱ区加工段3実測図(1:60)	第 36 図	Ⅱ区調査区土層図(1:40)
第 18 図	Ⅱ区加工段3出土遺物実測図(1:3)	第 37 図	Ⅱ区出土遺物実測図1 (1:3)
第 19 図	Ⅱ区加工段4実測図(1:60)	第 38 図	Ⅱ区出土遺物実測図2 (1:3)

第1章 位置と環境

小汐手遺跡・黒井田小林遺跡は、安来市黒井田町に所在する。安来平野東側の丘陵が中海に向かって岬状に突出しており、その先端部に小汐手遺跡が位置する。西には、出雲国風土記に「砥神島」として記載のある十神山があり、周囲の遺跡の多くは丘陵上に確認されている。こうしたことから、当時の中海が現在より大きく内陸部に入り込んでいたことが想像できる。黒井田小林遺跡も低湿な谷に立地しており、海岸線が近くに迫っていたことを示すものであろう。この付近の丘陵部は近年、安来道路の建設に伴い多くの遺跡の発掘調査が行われ、周辺の歴史的環境を考える上での多くの資料の蓄積がなされている。以下、周辺の遺跡を時代を追って概観してみたい。

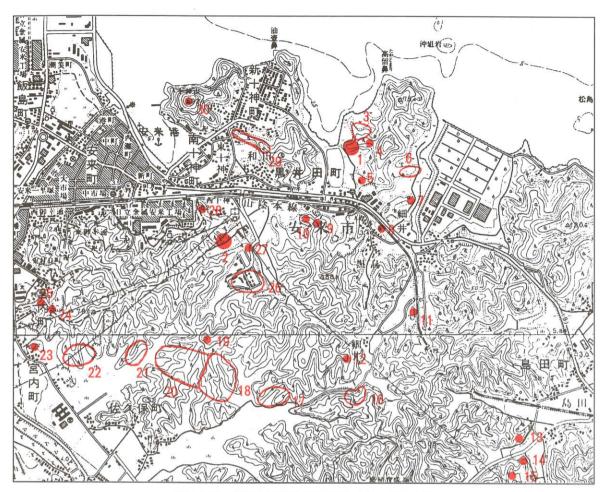
旧石器時代から弥生時代前期に至るまで遺跡の確認例は少ない。島田黒谷 I 遺跡や高広遺跡などから縄文土器を検出しており、古い時期から人々が生活をしていたことを偲ばせるものではあるが、多くの遺跡が確認されるのは弥生時代中期以降である。中期後半には、高広遺跡・宮内遺跡・大原遺跡で住居跡が確認される。さらに、後期にはいると前記の遺跡の他に越峠遺跡・岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡・岩屋口南遺跡・普請場遺跡など、集落遺跡の確認例が格段の増加をみせる。この時期の住居跡は、丘陵上部での検出例が多く、特に岩屋口北遺跡は、通信の役割をもった高地性集落である可能性が指摘されている。また、この時期は同時に墳墓も確認されるようになり、長曽土壙墓群や臼コクリ遺跡で区画や墳丘をもった土壙墓が造られる。

古墳時代前期には、新林古墳群が築かれる。1号墳は径20mを測り、鉄剣・管玉などが副葬されている。中期にはいると、この地域の首長墓として毘売塚古墳が築造される。この古墳は全長42mの帆立貝式前方後円墳と考えられ、舟形石棺を直葬している。この他に首長墓と考えられる墳墓として、前方後方墳である油坪1号墳、前方部が存在する可能性のある十神山古墳、大型円墳であるあんもち山古墳があげられるが、いずれも墳丘規模は毘売塚古墳の約半分である。また、小汐手遺跡の東側にある小馬木古墳群では、2号墳から珠文鏡・家形埴輪などの遺物が出土している。

古墳時代後期には、多くの横穴墓が築かれるが、家形石棺を内蔵したり、金銅装の大刀や馬具などの豪華な副葬品をもつ横穴墓が多い。臼コクリ遺跡・宮内遺跡・大原遺跡・高広遺跡などがこうした横穴墓である。その他、小汐手遺跡の北側にのびる丘陵からは、19基にものぼる横穴墓群が発見された。古墳時代の住居跡は、長曽遺跡・高広遺跡・岩屋口南遺跡・越峠遺跡・大原遺跡・普請場遺跡で確認されている。中でも、大原遺跡からは中期の玉造工房跡が検出されている。

以上、安来平野東縁部の遺跡について概観した。この地域は、狭隘な谷が多く耕作可能な平野が 決して多いとはいえない。しかし、多くの遺跡が密集する地域であり、特筆すべき遺跡も少なくな い。これは、この周辺が出雲・伯耆の境界に近いと言うことが理由に挙げられ、古くから安来市内 において重要な位置にあったという事ができよう。

- 註(1) 丹羽野 裕ほか『岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡(F区) 一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調 査報告書13』島根県教育委員会 1997
 - (2) 1998年安来市教育委員会調査



第1図 周辺の遺跡位置図(1:25,000)

周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種 別
1	小汐手遺跡	集落跡	16	才ノ神遺跡	集落跡
2	黒井田小林遺跡跡	集落	17	越峠遺跡	集落跡
3	小汐手横穴墓群	横穴墓	18	岩屋口遺跡	集落跡、横穴墓
4	小馬木古墳群	古墳群	19	大神谷古墳群	古墳群
5	長曽遺跡	集落跡	20	臼コクリ遺跡	集落跡、横穴墓
6	浜小崎古墳群	集落跡、古墳	21	大原遺跡	集落跡、古墳他
7	米垣山横穴墓	横穴墓	22	宮内遺跡	集落跡、横穴墓
8	黒鳥横穴墓群	横穴墓	23	あんもち山古墳	古墳
9	長曽土壙墓群	土壙墓群	24	新林古墳群	古墳、中世墓
10	刎畑古墳群	古墳群	25	糺神社古墳	古墳
11	大納言山古墳	古墳	26	高広遺跡	集落跡、横穴墓
12	越峠古墳	古墳	27	客さん古墳	古墳
13	島田南遺跡	集落跡	28	毘売塚古墳	古墳
14	島田黒谷I遺跡	散布地	29	油坪古墳群	古墳群
15	普請場遺跡	集落跡	30	十神山古墳	古墳

第2章 小汐手遺跡

第1節 調査に至る経緯

浦ヶ部地区住宅団地造成事業は安来市総合計画に基づいて平成5年度に計画され、それに伴い安 来市都市開発課より埋蔵文化財の有無に関する照会があった。これを受けて分布調査を行ったとこ ろ予定地内の東側に突き出た尾根上に遺跡の所在する可能性があり、平成7年10月11日付で提出 された試掘調査依頼を受けて同10月13日より試掘調査を行った。このうち、試掘調査で遺構の確 認された尾根上から丘陵南側斜面で平成8年5月より本調査を実施した。

第2節 調査の経過

試掘調査で遺構の確認できた範囲は大きくふたつに分かれたため、丘陵頂部から南側に広がる緩斜面をⅡ区、丘陵裾部をⅠ区とした。Ⅰ区は排土の関係から、さらに東西2つに区切り平成8年5月よりⅠ区東側の調査を開始した。続いてⅡ区を平成8年6月より開始し、Ⅰ区東側の調査が終了した後、Ⅰ区西側の調査を平成8年8月より開始した。Ⅰ区の遺構の広がりを確認するため、道路部分への調査区の拡張、水田内のトレンチ調査を行い、平成9年3月に現地での調査を終了した。



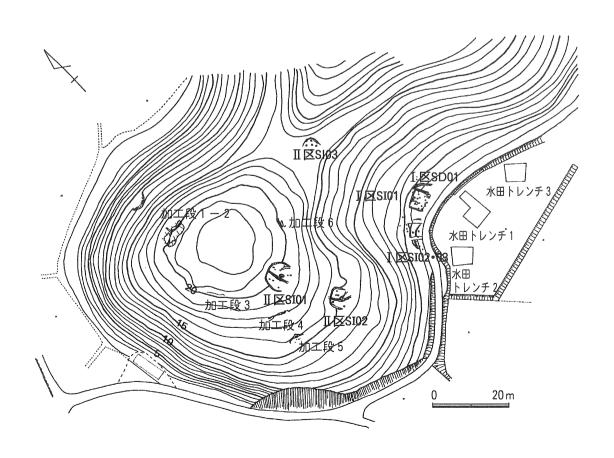
第2図 調査区配置図(1:1,000)

第3節 調査の概要

I 区からは、弥生時代後期から古墳時代中期の竪穴式住居跡 3 、溝状遺構 1 を、Ⅱ区からは弥生時代後期の竪穴式住居跡 3 、加工段 5 を検出した。

I 区は、谷状地形の丘陵裾部に位置し、標高は $4\sim6$ mを測る。検出した遺構は、 $SI01\sim0$ 3、SD01 とピット多数である。I 区は南側に広がる可能性があったため道路部分にまで調査区を拡大したが大きく削平されており、遺構の広がりは確認できなかった。また、調査区に続く水田中に遺構の有無を確認するためにトレンチを3 r 所設定したが、遺構を確認することはできなかった。しかし、現在の水田面が当時は低湿地もしくは、海岸であったのではないかという事が確認された。

II区は、最高所で標高23mを測る。ここから南側に広がる緩斜面にSI01~02、SB03~06が点在し、北側の最高所付近にSB01~02が検出された。また、北東に続く尾根上の鞍部にSI03が検出された。II区南側斜面のほぼ中央を土地境界の溝が南北にはしり、最高所で東に曲がる。この溝は、SI01・02の中央をはしっており、遺構を傷つけているが、トレンチのような役割を果たし、遺構の検出に一役買った。遺構に伴うものではないが、SI03付近のの堆積層から玉髄製の削器が出土している。後期旧石器時代のものと考えられ、当時の特徴的な技法で造られた非常に貴重な資料である。



第3図 調査後地形測量図(1:1,000)

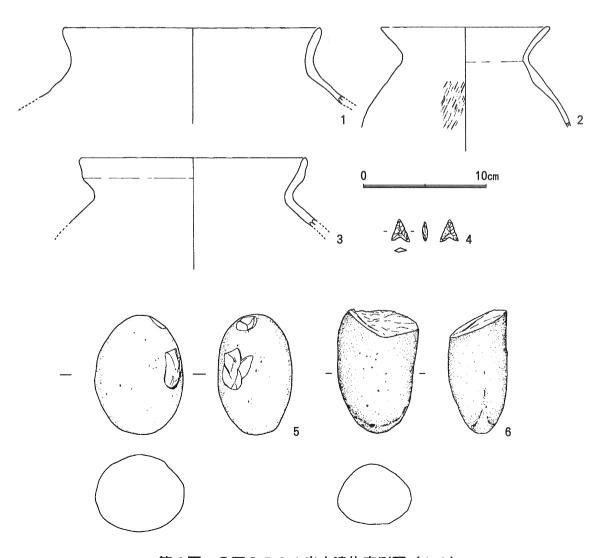
第4節 調査の結果

I区

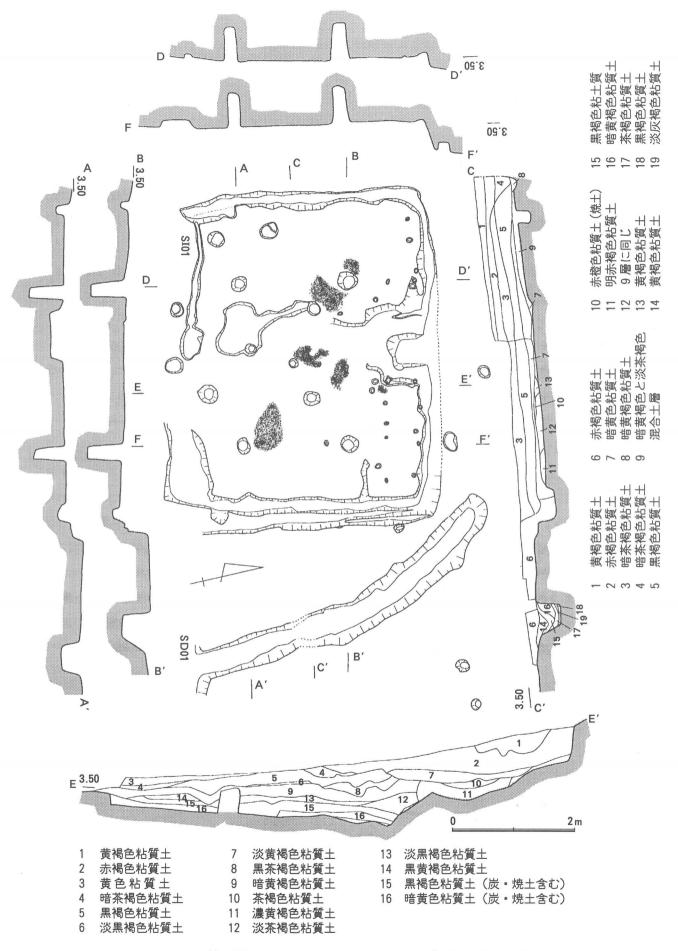
SI01(第5図)

I区のほぼ中央、標高約4 m、谷状地形の緩斜面で検出された、方形の竪穴住居跡である。周壁肩部で約4 m×5 mの規模をもつ。住居の床面からはピット11基と4ヶ所の焼土面、溝を検出している。床面北側中央では、側溝を伴う壁際土坑(特殊ピット)を検出している。また、南側周壁付近では、径10㎝前後、深さ5~7㎝の小ピットを多数検出している。壁面に板をたてるためのものとも考えられるが、性格は不明である。ピットの内、主柱穴は配列から4であると思われる。焼土面は、住居跡の中央部付近に4ヶ所点在している。溝は、南側で途切れており、幅は上縁で15㎝~30㎝、深さ5㎝~15㎝である。床面南側にも浅く溝が走るが周溝とは性格が異なると思われる。SI01出土遺物(第4図)

いずれも床面付近から出土した遺物である。 $1 \sim 3$ は土師器の甕である。 1 は、復元口径 $20.8\,\mathrm{cm}$ で口縁部は外反して立ち上がり、端部は丸くおさめている。 2 も同様に口縁部が外反している。



第4図 I区SI01出土遺物実測図(1:3)



第5図 I区SI01・SD01実測図(1:60)

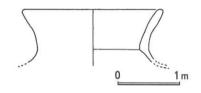
3 は、複合口縁が退化した形態で口縁は外反気味に短く立ち上がる。いずれの遺物も風化が激しく調整痕等ははっきりしない。いずれも古墳時代中期のものと考えられる。 $4 \sim 6$ は石器である。 4 は安山岩製の石鏃で先端部と返しの一部がかけている。 $5 \cdot 6$ はたたき石で、 6 は先端部に使用痕が見られる。

SI02・03 (第8図)

SI01のすぐ西側に隣接し2棟が切り合う形で検出された。住居の南側は流出しているものと考えられる。SI02には、周帯溝と思われる溝が巡っているが、壁面の立ち上がりは大きくなく最大でも約0.2mである。SI03からも溝を検出しているが、こちらは壁面の立ち上がりは確認できない。SI02とSI03の前後関係ははっきりと確認はできないが、ピットと溝の切り合いの状態からSI02が先に築造された可能性が高いと思われる。ピットはSI02に伴うものとして4基が、SI03に伴うものとして3基が確認された。しかし、不規則に検出されていることもあり、主柱穴の配列・本数は不明である。

SI02 · 03出土遺物 (第6図)

1は土師器の甕である。復元口径は11.2cmで外 反する単純口縁をもつ。風化のため調整痕は判断 できなかった。土器の形態から、弥生時代後期の ものと考えられる。

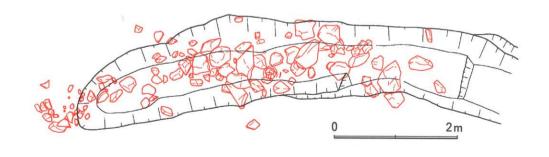


第6図 I区SI02·03出土遺物実測図(1:3)

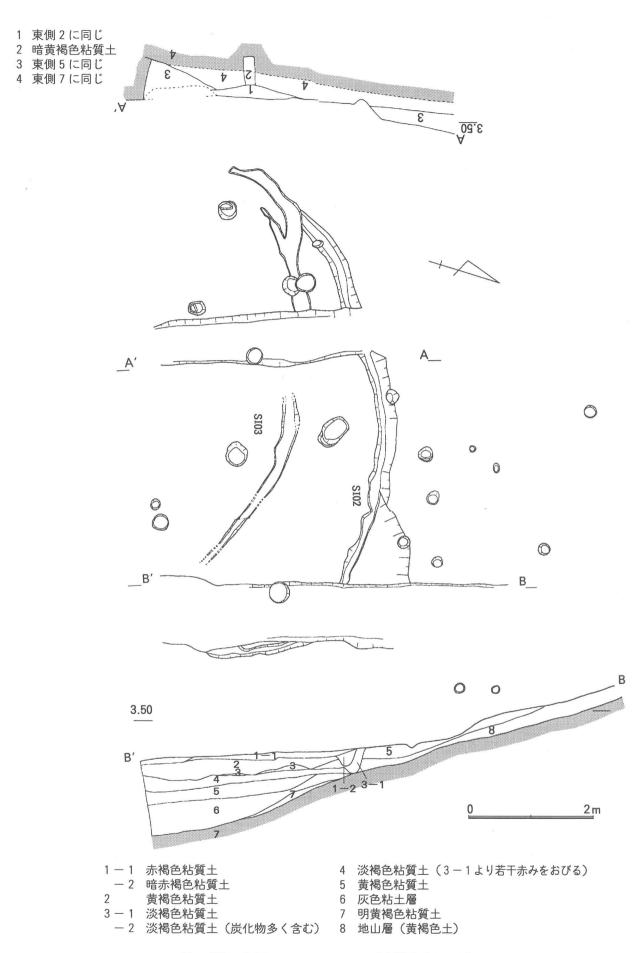
SD01 (第7図)

SIO1の東側に隣接し、南北に走る形で検出された。検出時には集石遺構と考えていたが、石を撤去し精査を行ったところ溝状遺構であることが確認された。この遺構の中の石が集まり方は、標高の高い北側に偏り、南側ではまばらになる。また、北側は溝が深く南に行くほど浅くなる。溝の底の部分も石がある部分はなだらかで、南側に行くほど傾斜が大きくなっていく。

石の入り方は、あたかも溝を埋めるかのようで、その中から小型の壺が供えられるように置かれた状態で出土している。こうしたことから、集石は自然の流入というより、何らかの人為的なものと考える方が自然であると思われる。



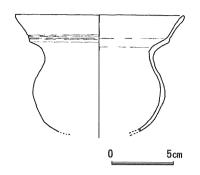
第7図 I区SD01実測図(1:60)



第8図 I区SI02・03実測図(1:60)

SD01出土遺物(第9図)

遺構上面の集石部から出土した土師器の甕である。大きく外反する複合口縁をもち、外面に凹線文を施す。しかし、風化が激しく何条であるかは確認できず、調整痕も判断できなかった。口縁部に比べ体部が小さい。口縁部の形態から弥生時代後期後葉のものと考える。



第9図 I区SD01出土遺物実測図(1:3)

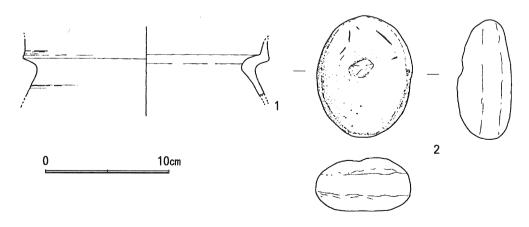
II 🗵

SI01 (第11図)

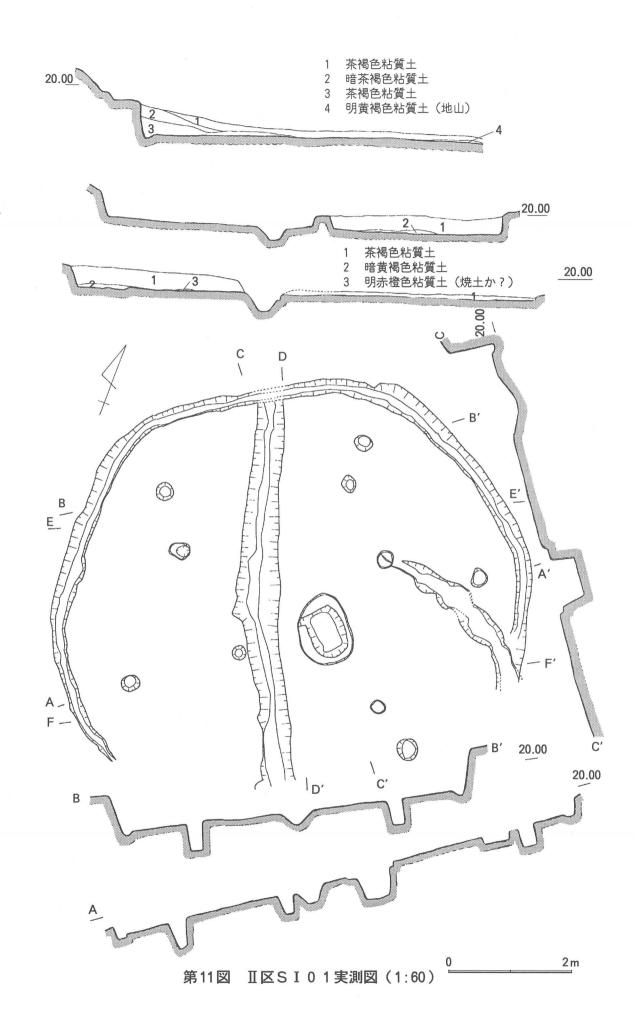
調査区の中央付近、標高約20mの地点で検出された六角形の竪穴住居跡。規模は一辺約2mを測る。壁面の立ち上がりは最大で0.6m、床面からは、主柱穴6基、ピット4基、中央ピット、溝を検出している。主柱穴のうち1基は、土地境界の溝に切られており、半分程度しか検出できなかった。中央ピットは二段に掘りこまれており、上縁部で1.1m×0.8mの楕円形で深さ約50cmである。一段目は浅く、深さ3cm前後で、2段目は上縁部0.8m×0.6mの大きさで深く掘り込まれる形になっている。基底部からは、10×15cm程の大きさの平らなレキが2枚重なって出土している。溝は南側で途切れており、上縁で幅20~30cm、深さは6~15cmである。床面はほぼ平坦であるが、南側が若干低くなる。

S I 0 1 出土遺物 (第10図)

1は、土師器の甕である。口縁端部がなく風化も激しいため、凹線文は3条しか確認できなかったが、端部の側にも続くと推定できる。体部にも2条の凹線文を確認することができる。風化が激しく調整痕は検討することができなかった。2は、たたき石で底部に使用痕を見ることができる。土器の時期は弥生時代後期と考えられ、これに伴いSI01の時期も弥生時代後期と考えることができる。



第10図 Ⅱ区SⅠ01出土遺物実測図(1:3)

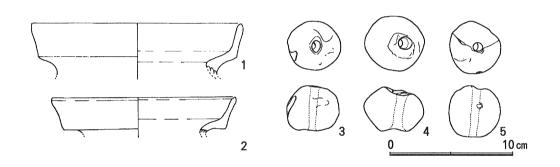


S I 0 2 (第13図)

調査区の南端、SI01から約4m下がった地点で検出された隅丸方形の竪穴住居跡である。規模は現状で約 $4m\times 5m$ である。壁面の立ち上がりは最大で約0.7mである。床面からはピット4基、溝を検出している。配列から本来4本柱だったと思われるが、土地境界の溝によって1ヶ所が消失しており、現存する主柱穴は3基である。溝は、南側以外の三方に巡っており、上縁で幅30cm前後、深さ $5\sim 10$ cmである。床面は、南側の主柱穴付近から大きく落ち込んでいる。後世の削平によるものと考えられるが、斜面に貼り床をし、平坦面を造っていた可能性もある。貼り床部分が流失したため床面が大きく落ち込んでいるという可能性も考えなくてはならないだろう。しかし、現状では判断することはできなかった。

S I 0 2 出土遺物 (第12図)

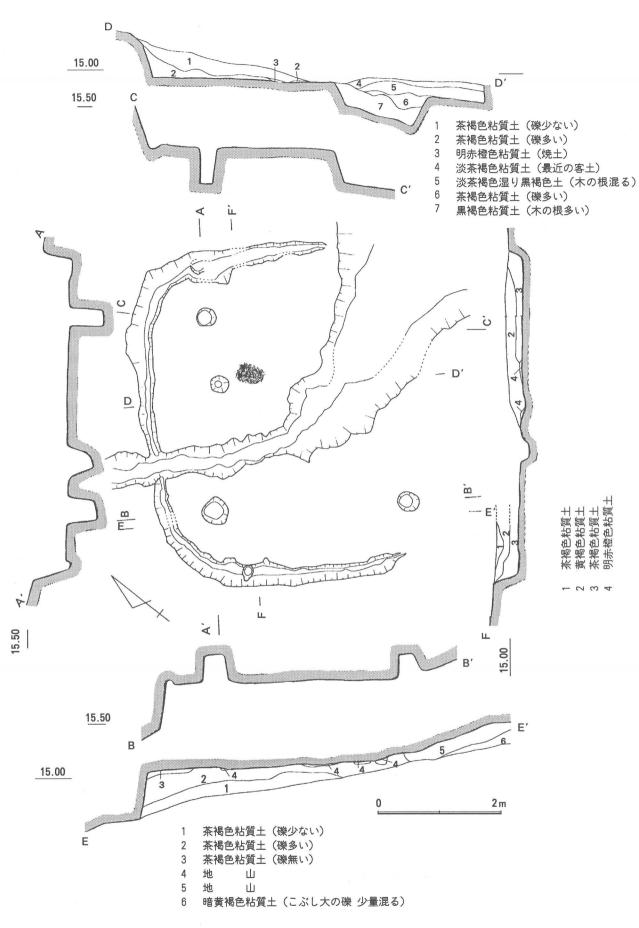
1・2は土師器の甕で、外反する複合口縁をもつ。風化が激しく調整手法は判断することができなかった。復元口径は1が17.2cm、2が14.9cmである。いずれの遺物も弥生時代後期のものであると考えられる。 $3\sim5$ は土錘で、一部欠けているものもあるが球形である。いずれも $4\sim5$ cm大の大きさである。遺物の時期から、この遺構は弥生時代後期のものであると考えられる。



第12図 Ⅱ区SI02出土遺物実測図(1:3)

S I 0 3 (第14図)

調査区の東、尾根上の鞍部に位置する竪穴住居跡である。周壁は、西側が流出しているが、残存している北側、東側の周壁から約4×4.5mの規模をもつ、隅丸方形の住居跡であると思われる。 床面からは、主柱穴4、中央ピット、溝を検出した。主柱穴間2m×2mである。中央ピットは上縁径約40cm、深さ約40cmである。溝は、東側の周壁の付近で確認されているが、非常に浅い。 北側の周壁付近では溝の体をなしておらず、床面が周壁付近で若干低くなっている程度である。床面はほぼ平坦である。



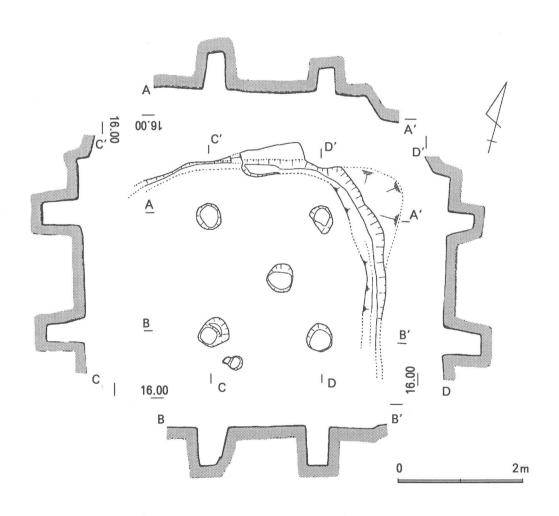
第13図 Ⅱ区SI02実測図(1:60)

S I 0 3 出土遺物 (第15図)

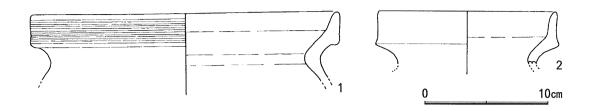
1は、土師器の甕である。口縁部全体が肥厚し6条の凹線文を施す。内面は風化が進んでいるが ヘラケズリを施していると考えられる。2は、床面より高い層から検出されたため遺構に直接伴う ものかは不明である。風化が激しく調整は不明だが口縁部が直立気味に立ち上がる。いずれの土器 も弥生時代後期のものであると考えられる。

加工段1・2 (第16図)

最高所から 2 mほどさがった丘陵北側斜面に中海を望むように、 2 ヶ所並んで検出。切り合っている可能性もあるが遺構の流出が激しく不明である。加工段 1 からは周壁付近に溝を検出したが、加工段 2 からは検出できなかった。規模は、加工段 1 が幅約 4 m、奥行最大 1 mである。加工段 2 は、幅 3.4m、奥行 1.8mである。テラスの大部分は流失していると考えられ、ピットも検出できなかった。



第14図 II区SI03実測図(1:60)



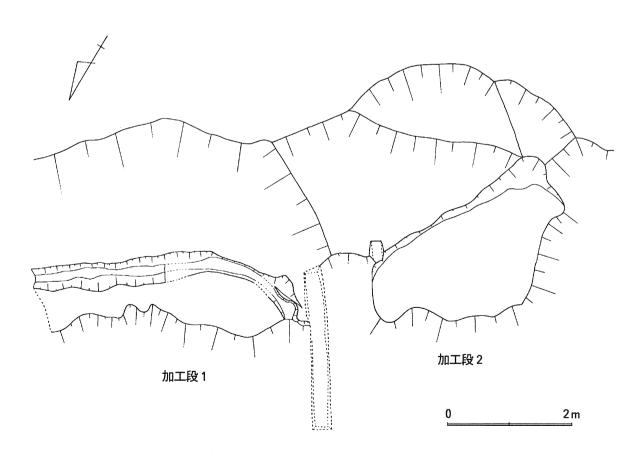
第15図 Ⅱ区SⅠ03出土遺物実測図(1:3)

加工段1・2出土遺物

加工段1からは遺物は検出できなかったが、加工段2からは小片であるが土師器が出土している。 風化が激しい遺物のため実測には耐えないが、形態から弥生時代後期のものの可能性が大きいと思 われた。このためこの遺構についてもこの時期のものであると考えた。

加工段3 (第17図)

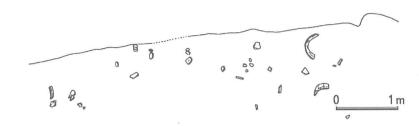
SI01の北西側ほぼ同じレベルで検出された遺構。床面からは溝、ピットは確認できず壁面の立ち上がりも明確ではない。このため、自然地形を利用した段と見ることもできるが明らかな平坦面があり、床面直上からは多数の遺物を検出した。このため加工段としたが、正確な遺構の性格は不明である。規模は現状で幅約4 m、奥行約0.8mである。この遺構の中から、原形は不明であるが棒状の鉄製品が1点出土している。



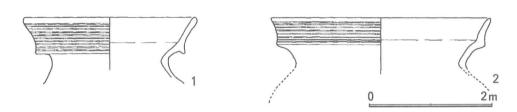
第16図 Ⅱ区加工段1・2実測図(1:60)

加工段3出土遺物(第18図)

1・2とも土師器の甕である。 いずれも外反する複合口縁をもち 1は10条、2は8条の凹線文を施 す。内面の調整はナデだと思われ るが、風化のためはっきりしない。 復元口径は1が、13.6cm2が、17.8cm を測る。時期は弥生時代後期と考 えられ、この遺構も弥生時代後期 のものであると思われる。



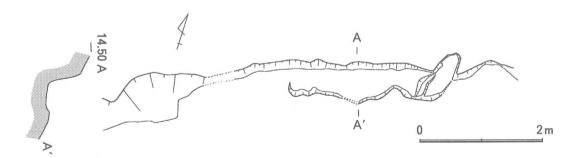
第17図 Ⅱ区加工段3実測図(1:60)



第18図 Ⅱ区加工段3出土遺物実測図(1:3)

加工段4 (第19図)

SI01とSI02の中間地点で検出された遺構。標高17.5mを測り、現状で幅5.5m、奥行1mの規模をもつ。テラスは大部分が流失していると考えられ、この遺構に伴うピットは検出できなかった。遺構の中央部付近から東側に浅い溝がのびるが、性格は不明である。また、この遺構に伴う遺物も確認できなかった。このため、時期・性格について詳細に検討することはできなかった。しかし、周辺の遺構に伴って、弥生時代後期の遺構である可能性が大きいと考えられる。

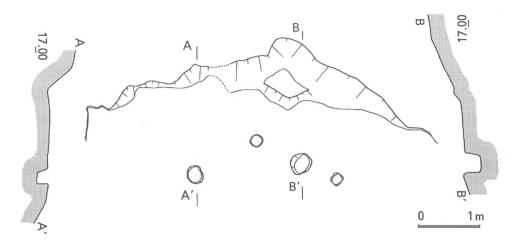


第19図 Ⅱ区加工段4実測図(1:60)

加工段5 (第20図)

南側斜面 S I 0 2 の西、ほぼ同じレベルで検出された遺構。テラス部分が流失していると思われ規模は不明だが、現存する部分は幅 5.6m、奥行き約 1.8m である。この遺構に伴ってピットが 4 基検出された。西端のピットは 10cm 程の深さしかなく柱穴となるかは疑問である。その他のピットは

30㎝程の深さをもつが、柱穴の配列や構造物に伴うものかは不明である。



第20図 Ⅱ区加工段5実測図(1:60)

加工段5出土遺物(第21図)

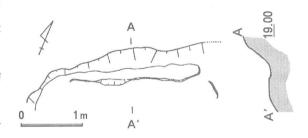
土師器の甕である。外反する複合口縁をもつ。風化のため不明瞭であるが、4条程度の凹線文が確認できる。調整痕は確認することができない。復元口径は11.8cmである。形態から時期は弥生時代後期のものと思われる。

0 1m

第21図 Ⅱ区加工段5出土遺物実測図(1:3)

加工段6 (第22図)

Ⅱ区の最高所から2mほど下がった、南側の緩斜面に向かうように立地している。テラスの大部分は流失していると考えられ、壁面の立ち上がりと周帯溝らしき遺構しか検出できなかった。壁面の立ち上がりは約50cm、溝は上縁で幅20~30cm、深さ2~3 cmである。床面と考えられる平坦面は、約30cmが残っているにすぎず規模は不明である。この遺構に伴う遺物も確認できなかった。このため、この遺構の性格について検証



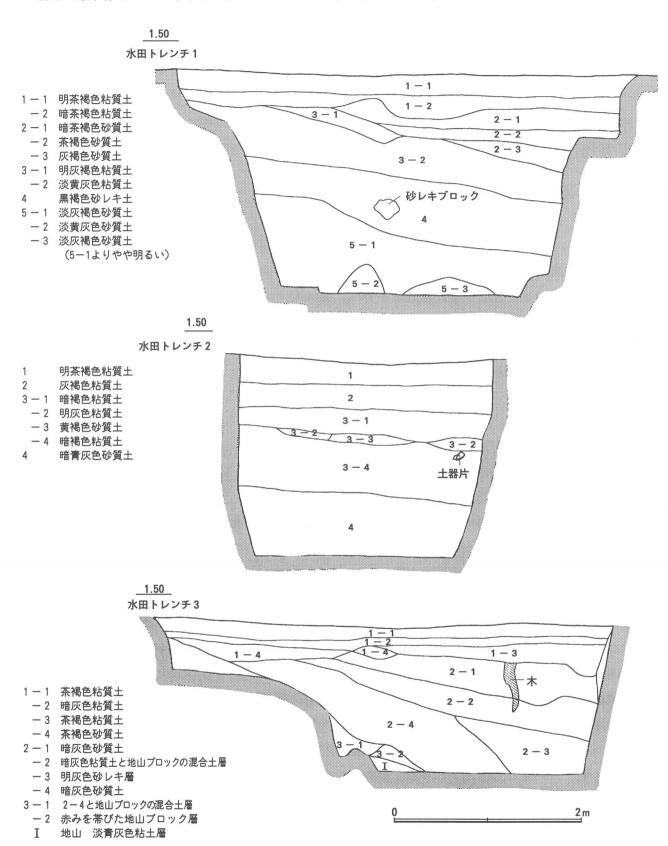
第22図 Ⅱ区加工段6実測図(1:60)

することはできなかったが、周辺の遺構同様、弥生時代後期のものである可能性が大きいと考えている。 **水田トレンチ (1~3)** (第23図)

遺構の広がりを確認するために丘陵裾部の南側の水田内に3ヶ所のトレンチを設定した。3ヶ所とも、遺構は確認できなかった。しかし、旧地形を知るうえでの貴重な資料となった。

各トレンチとも若干の差異はあるが、おおむね40~50cmの耕作土の下に有機物を含む砂質土層があり、エビ・カニなどの生物が作ったと思われる巣穴の痕跡が発見された。その下には粘質土層があり洪水などで堆積した流入土であろうと考えられる。さらに、その下に砂礫層があり、ここは海中堆積物の層であろうと考えられる。ここまでが堆積層で、その下が地山層である。この層にも生物の巣穴の跡が残っている。このセクションによって海面が堆積や洪水などによって後退していく様子が想像できる。

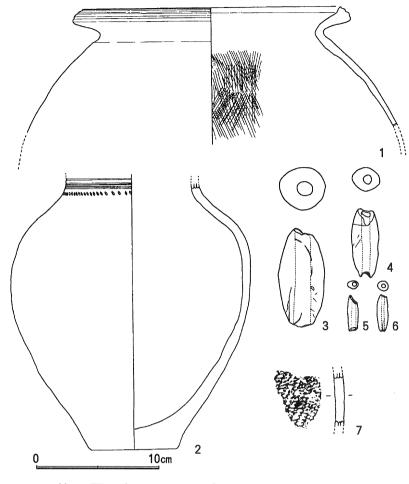
こうしたことから、丘陵部に住居跡のあった弥生時代後期から古墳時代には、トレンチを設定した地点が海岸線もしくは、低湿地であったという事が確認できた。



第23図 水田トレンチセクション図(1:40)

水田トレンチ出土遺物 (第24図)

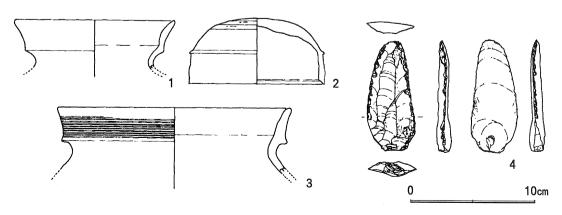
いずれも、第2トレンチ内から 出土している。 1・2 は大型の甕 である。1の口縁部は大きく外反 し、3条の凹線文を施している。 内面にハケ調整を行っており、外 面はハケ調整ののち、ヘラミガキ を行っている。時期は弥生時代中 期であろう。2は頸部に凹線文、 列点文を施している。はっきりし ないが内外面ともヘラミガキを施 しているように見える。時期は弥 生時代前期であろう。3~6は土 錘で3は約7cm、4は約5cmの大 きさ、5・6 は約3 cmの小型のも のである。7は縄文土器であるが、 小片のため器種等は不明である。 表面に撚糸文を見ることができる。 この他にも何点か縄文土器の小片 がトレンチ内から出土している。



第24図 水田トレンチ出土遺物実測図(1:3)

遺構に伴わない遺物 (第25図)

1・3は、土師器の甕である。いずれもI区の流入土の中から検出された。3は、10条の凹線文を施すが、1は無文である。外反する複合口縁をもち、どちらも弥生時代後期のものであると考えられる。2は須恵器で坏蓋である。天井部と口縁の境に明確な稜をもち、口縁端部の内面に明瞭な段がつく。古墳時代前期のものであろう。4は、玉髄製の削器である。II区SI03付近の丘陵鞍部から出土した。長さ8.95cm、幅3.7cm、厚さ1.15cmを測る。遺構に伴わない単独の遺物のため時期の特定はむずかしいが、「石刃技法」と呼ばれる後期旧石器時代に特徴的な技法で造られていることからこの時期のものであろうと思われる。



第25図 遺構に伴わない遺物実測図(1:3)

第5節 まとめ

I 🗵

I区からは住居跡 3 棟と溝状遺構 1 を検出した。出土遺物から判断すると S I 0 1 だけが古墳時代中期のものである。当初、 S I 0 1 と S D 0 1 は関連のある遺構と考えたが、時期的に大きく開きがあることが分かったため直接的に関連があるとは考えにくくなった。遺物の時期から S D 0 1 が埋まったのは弥生時代後期以前のことと考えられ、遺構上面の集石部分が何らかの形で機能していたのもこの時期頃までであると思われる。時期だけで考えると S I 0 2 • 0 3 とのつながりも考えられるが、 2 つの遺構を結びつけるだけの決定的な根拠はなく、 S I 0 1 も含めてそれぞれの遺構の関連については今後検討をしていかなければならない問題である。 S D 0 1 上面の集石が何を意図したものか、どういう機能もつものか定かではないが、遺物の出土のしかた、溝への石の入り方などから見て自然な流入とは考えがたく、人為的なものと考えてよいであろう。この遺構の性格づけについても、遺物などの情報が少なく非常に困難なため、今後の課題としておきたい。

II 区

Ⅱ区からは、3棟の住居跡と6基の加工段を検出した。I区も同様であるが、出土遺物が少なく風化の進んでいるものが多いが、住居跡の形態などと考え合わせると弥生時代後期のものであると思われる。加工段のうち時期の分からないものについても、他の遺構と別の時期に単独で立地していたものとは考えにくく、Ⅲ区の遺構はすべて同時期に営まれていたものと考えて問題ないと思われる。このうち、SI01はその規模、多角形という形態から、他の遺構と一線を画している。これは、この住居が他の遺構群の中心的位置にあったという事が考えられる。しかし、出土遺物が少なく、加工段は非常に残りが悪いと思われることなど、遺構全体に関する情報量が少なく推測の域を出ない。また、Ⅰ区の遺構との関連性も考えあわせ、遺跡全体の中での検証を行う必要があろう。Ⅲ区出土玉髄製削器について

Ⅲ区丘陵鞍部から出土した石器は、遺構に伴わず単独で出土したものであるが、その技術的特徴から時期を推測できる非常に貴重な資料である。この石器は、縦長の非常にきれいな剥片を用いているが、これは同じ方向から、同じような形の剥片を連続して取る技術によって得られた剥片である。こうした技術は「石刃技法」と呼ばれ、後期旧石器時代(約3万年前~1万3千年くらい前)に特徴的な技術である。この技術は、東北日本でよく発達したもので、東北地方とこの地方の関係を推測したくなる資料であるが、一点の遺物だけでは何ともいえず、今後の資料の増加を待ちたい。いずれにせよ後期旧石器時代には、この丘陵もしくはこの丘陵の周辺で人々の営みがあり、水田トレンチ内で出土した縄文土器と考えあわせると、古い時期から人々が生活していたことが想像できる。

註 (1) 中村唯史・徳岡隆夫ほか「安来市岩屋遺跡および小汐手遺跡で発見された縄文から弥生時代の旧海岸地形」『山陰地域研究No.14』島根大学汽水域研究センター 1998

⁽²⁾ この遺物については、島根県埋蔵文化財調査センター 丹羽野 裕氏に多くのご教示をいただいた。

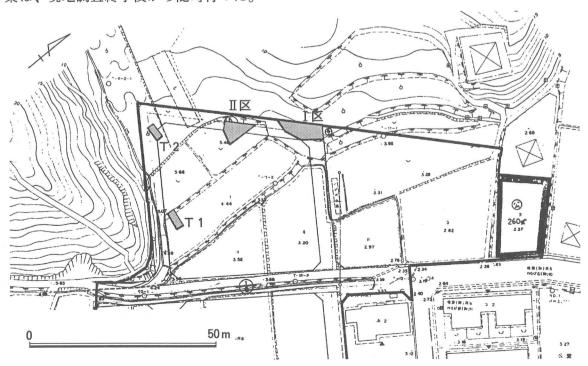
第3章 黒井田小林遺跡

第1節 調査の経緯と経過

黒井田小林遺跡は安来市黒井田町540番地字小林他に所在する。遺跡の立地は現在の中海の海岸線から約0.5km陸地に入った低丘陵が入り組んでいる狭い谷の標高約5mの南に面した丘陵裾の緩斜面に位置する。

遺跡の所在する背後の丘陵には、舟形石棺を主体部とする全長42mの帆立貝式前方後円墳である 毘売塚古墳があり、谷を挟んだ向かいの丘陵には石棺2基を主体部にもつ古墳時代後期前半の客神 社跡古墳があり、同古墳が所在する丘陵の南側には弥生時代から奈良時代にかけての集落跡や家形 石棺を内蔵し金銅装大刀を副葬した横穴墓群などの高広遺跡が広がっている。

当遺跡の調査の経緯は、安来市わらび谷地区土地区画整理事業が計画され市都市計画課から市教育委員会に埋蔵文化財の有無についての照会があったことに始まる。これを受け、平成9年度に分布調査を実施した結果、事業区域内の北西側の緩斜面において遺物散布地が確認された。遺跡の有無を確認するために平成10年10月1日に、この北西側の緩斜面にトレンチを4箇所入れた結果、丁3と丁4において遺物包含層・遺構を確認した。この結果を受けて市都市計画課と取り扱いについて協議した結果、遺跡の現状保存は困難であり、また工期も限られていることから早急に発掘調査を実施し記録保存を行うこととなった。当事業はほとんどが盛土により造成することから事業区域内の道路部分についてのみ本調査を実施することとなり、確認した遺跡を黒井田小林遺跡として丁4で確認した遺構をI区、丁3で確認した遺物包含層をII区として10月5日から調査を開始し、途中3週間の調査中断を挟み、11月8日に現地調査を終了した。出土した遺物、記録等の整理報告作業は、現地調査終了後から随時行った。

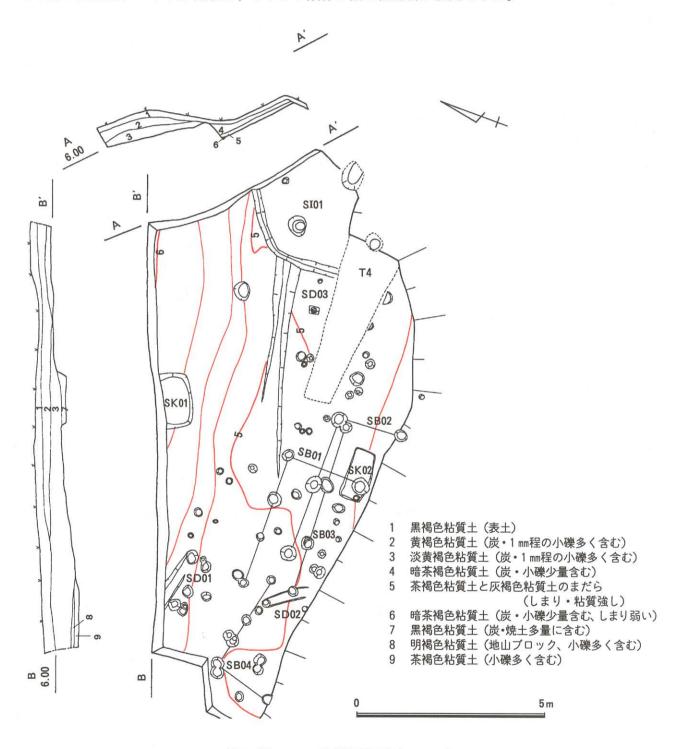


第26図 調査区位置図(1:1,000)

第2節 I区の調査

I 区は南向きの丘陵裾の標高約5 mの緩斜面に位置している。北側の調査区外にも広く緩斜面が大きく広がっていることから、今回は遺跡の範囲のほんの一端を調査したものと考えられる。調査前の状況は畑であった。

遺構の配置は、弥生時代後期の竪穴住居跡が一棟調査区の東端に立地し、その西側にはやや広い 平坦面が造成されピットが密集し、そのうち数棟の掘立柱建物が復元できた。



(1) 竪穴住居跡

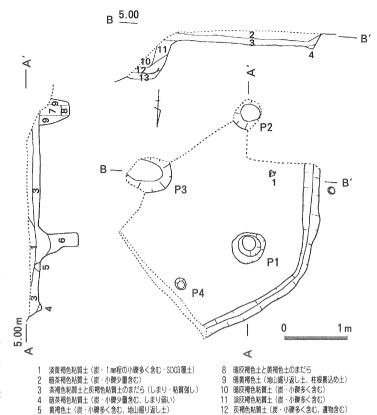
S I 0 1 (第28図)

調査区東端の標高約5m付近の緩斜面に立地し、東は調査区外に続いている。 住居跡の東半分は水田造成のため削平されている。平面プランが隅円多角形状を 呈する竪穴住居跡で、現状では2辺のみ 確認できる。緩斜面の地山を掘り込み、 水平な床面を削り出している。

住居跡内の覆土は、茶褐色粘質土と灰褐 色粘質土のマーブル、暗茶褐色粘質土の順 で堆積している。下層の覆土はしまりが大 変強く、弥生土器を一点含んでいた。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最も残りの良い北側壁で約25cmを測る。壁沿いには幅20cm、深さ $4\sim6$ cmの壁体溝が巡っている。

床面からピット4基検出した。このうち、P1・P2は主柱穴と考えられ、深



第28図 SI01実測図(1:60)

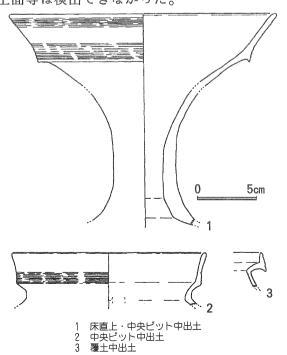
13 茶褐色粘質土 (炭・小礫多く含む)

さは床面からそれぞれ62・46cmを測り、 $P1 \cdot P2$ 間の距離は2.04mである。柱痕が土層で確認できたP2では、柱径は約16cmを測る。P3は床面のほぼ中央に位置し中央ピットと考えられる。平面プランは不整円形を呈し、深さ60cmを測る。P1の北東側に径18cm、深さ20cm程のP4を検出したが、性格等は不明である。なお、床面から焼土面等は検出できなかった。

茶褐色粘質土 (炭・小礫多く含む)

暗灰褐色土(炭・小礫少量含む、柱根跡)

遺物は、覆土中と床直上とP3の底部付近から出土した。(第29図) 1 は床直上と中央ピットから出土したものが接合した鼓形器台である。細長い筒部を持ち、器受部が複合口縁状に大きく拡張している。内外面とも風化が著しく調整は確認しづらいが、口縁部に擬凹線文がわずかに認められる。2 は中央ピットから出土した弥生土器甕で、口縁部はゆるやかに外反しながら直立し、端部はわずかに肥厚する。上部は風化が著しく調整は確認できないが下部は擬凹線が認められる。3 は覆土中から出土した弥生土器甕で、口縁部はわずかに拡張され内傾し3条の凹線を施す。1・2 は弥生時代後期中葉(草田編年2期)、3 は後期前葉(草田編年1期)と考えられる。



第29図 SI01出土遺物実測図(1:3)

(2) 掘立柱建物跡

調査区の西方の標高 5 m付近に $11\text{m} \times 4 \text{ m}$ ほどの比較的広い平坦面が削り出されており、そこから多数のピットが検出された。(第27図) 4 棟の掘建柱建物跡($SB01\sim04$)を復元したが、検出した柱穴の密度や数から考えると復元できなかった建物跡も多い。

SB01 (第30図)

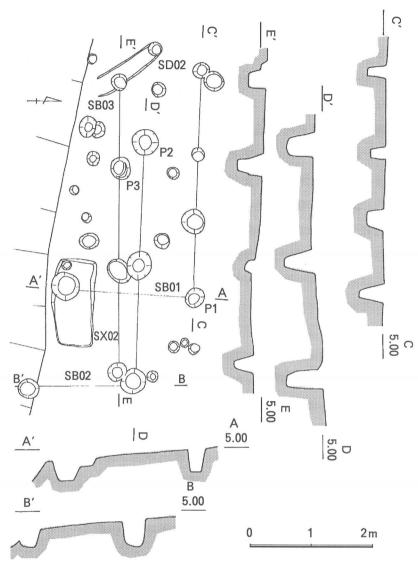
3 間 \times 1 間以上の柱穴配置を持つ。SB02 & SB03 & 重なり合うように立てられているが、切り合い関係は不明である。ピットの平面形は円形で規模は、上縁で径22~46cm、深さ26~40cmである。柱穴間の距離はピットの中央で桁行で<math>1.1~1.3m、梁行で2.1mを測る。

出土遺物はP1の覆土中から 土師器の細片が1点出土してい る。

SB02 (第30図)

2間×1間以上の柱穴配置を持つ。今回復元した掘建柱建物のなかでは最もしかっりとした柱穴を穿っている。ピットの平面形は円形で規模は、上縁で径32~46cm、深さ30~60cmである。柱穴間の距離はピットの中央で桁行1.9~2.0m、梁行1.7mを測る。

出土遺物はすべてのピットで 土師器の細片が数点出土している。



第30図 SB01~03実測図(1:60)

SB03 (第30図)

前述したSB02の南西に隣接し、北西辺の桁行部分のみ確認している。3間の柱穴配置を持つ。 ピットの平面形は円形で規模は、上縁で径 $26\sim38$ cm、深さ $18\sim40$ cmである。柱穴間の距離はピットの中央で $1.4\sim1.8$ mを測る。ピットの深さが著しく異なるなど建物の復元に否定的な要素もある。

出土遺物はP3の覆土中から土師器の細片が1点出土している。

SB04 (第31図)

調査区西端に位置する建物で、2間以上×1間以上の柱穴配置を持つ。ピットの平面形は円形で規模は、桁行のもので上縁で24~32cm、深さ30~44cmである。柱穴間の距離はピットの中央で桁行

0.7~1.3m、梁行1.6mを測る。ピットの深さや柱穴間の距離に著しい差異があることなど建物の復元には否定的な要素もある。 出土遺物はP4・P5の覆土中から土師器の細片が数点出土している。

覆土中の遺物 (第32図)

地山直上の覆土中から出土した遺物である。(1~3)は須恵器蓋坏である。1 は蓋の天井部分で、比較的丁寧に回転へラ削りを施している。天井部にヘラ記号が認められる。2 は口径12.2cmを測り、比較的しっかりとした稜を持ち口縁部は丸く収めている。(1・3)とも大谷編年3~4期であろう。3 は坏身で立ち上がりが比較的高い。前述の蓋とほぼ同時期の遺物であろう。4 は土師器の単純口縁の甕で、器壁が比較的厚い。

(3) 土塘。溝

調査区から 2 基の土壙(S K 0 1 \cdot 0 2) と 3 条の溝(S D 0 1 \sim 0 3) を検出した。 このうち S D 0 3 は、表土直下から掘り込まれており後世のものと考えられる。

SK01 (第33図)

I 区北端で検出した土壙で、5.75m付近の緩斜面上に位置し、 北は調査区外に続いている。

丘陵斜面に直交して長方形の土壙を掘り込んでおり、規模は 1.5m×7.5m以上、深さは調査区北端で25cmを測る。 床面はほぼ水平だが若干北側が高くなっている。土壙内は炭・焼土を多量に含む黒褐色粘質土で充填している。

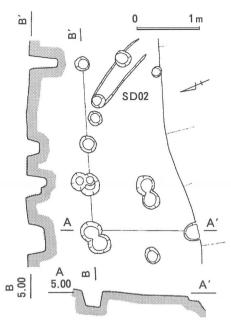
遺物は、覆土中から須恵器甕の体部片(第34図1)が一点 出土しているのみで、時期・性格とも不明である。

SK02 (第35図)

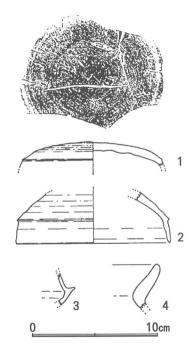
調査区の南端の平坦面に掘り込まれた SB 0 $1\sim0$ 3 の復元 した建物の中にあたる位置に立地している土壌である。プラン はほぼ東西方向に主軸を持つ長方形を呈し、規模は 1.4×0.6 m を測る。深さは約8 cm ほどと浅く、床面はほぼ水平に作られて いる。

遺物は覆土上面から出土した(第34図2・3)。2は弥生土器甕の口縁部で、口縁部は外反し擬凹線文を施す。3は須恵器蓋坏の蓋で、強いナデにより稜を作り天井部の約半分に回転へ ラ削りを施す。大谷編年3~4期の資料である。

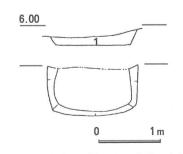
遺構の位置関係からみてSB02もしくはSB03の付随的な施設の可能性が考えられる



第31図 SB04実測図(1:60)

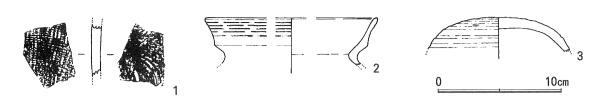


第32図 SB01~03 覆土中出土遺物実測図(1:3)



1 黒褐色粘質土 (炭・焼土多量に含む)

第33図 SK01実測図(1:60)



第34図 SK01・02出土遺物実測図(1:3)

SD01 (第27図)

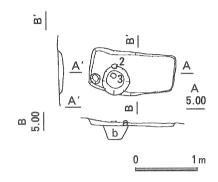
調査区の北西の標高5.5m付近に位置する。西端は調査区外に伸びている。溝の規模は現存する長さで1.2m、幅35cm、深さ10cm前後を測る。

出土遺物はなく時期・性格とも不明である。

SD02 (第30図)

調査区の西側に位置し、SB03・SB04と重なり合っているが、切り合い関係は不明である。溝の規模は現存する長さで0.7m、幅30cm、深さ10m前後を測る。

出土遺物はなく時期・性格とも不明である。



- a 黑褐色粘質土
- b 暗茶褐色粘質土 ※数字は第34図の遺物番号と対応

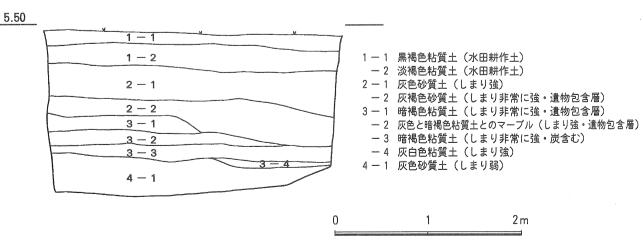
第35図 SK02実測図(1:60)

第3節 Ⅱ区の調査

1. 調査の概要

Ⅱ区は I 区の西側の東北東方向に湾入する細長い谷に設定した調査区で、調査前は水田として利用されていた。この谷は100m程で行き止まりとなっている。

調査区は一辺が7.5mの不定形な三角形となっている。第36図が東北-南西方向の断面図である。 表土下約0.35mまでが現代の水田耕作にかかわる粘質土層で、その下層は粘質土と砂質土の互層と なっている。遺物包含層は標高約4m付近で、その包含層は西側から流れている状況を示している。

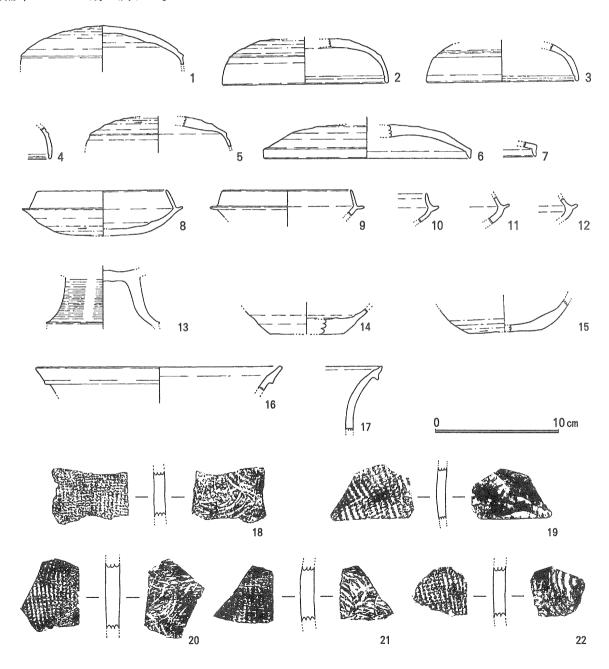


第36図 Ⅱ区調査区土層図(1:40)

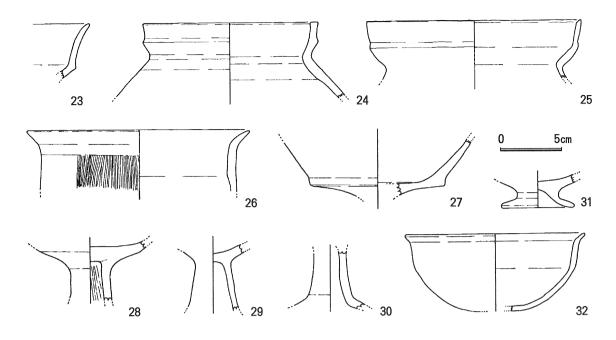
2. 出土遺物 (第37·38図)

遺物はすべて 2-2 層から 3-2 層の間から出土した。出土遺物の大半は古墳時代のものであるが、若干それを前後する時期の遺物も認められる。遺物の時期ごとの層位的な区別は、出土状況からは認められなかった。

 $(1\sim7)$ は須恵器蓋坏の蓋である。 1 は蓋の天井部で肩部は形骸化しているがなお稜を残している。 (2) は口径が13.6cmを測る比較的大型の蓋で、天井部には丁寧な回転へラ削りを施している。 肩部には 2 条の沈線を施し、口縁端部内面の上方に浅い沈線が認められる。 $(3 \cdot 4)$ も同様な調整を施している。 $(6 \cdot 7)$ は口縁端部が垂直に折れ曲がるタイプの蓋である。 (6) は口径 16.6cm を測る大型の蓋で、天井の中心部のみ回転へラ削りを施している。 $(2\sim3)$ は大谷編年 4 期、 $(6 \cdot 7)$ は高広編年 \mathbb{H} B $\sim \mathbb{N}$ 期に属する。



第37図 Ⅱ区出土遺物実測図1(1:3)



第38図 Ⅱ区出土遺物実測図2(1:3)

- $(8\sim12)$ は須恵器蓋坏の坏身である。(8) は口径10.2cmを測り、立ち上がり部はやや内傾気味に比較的長く立ち上がり、端部は丸く収めている。(9) は口径10.4cmを測り、(8) とほぼ同様なタイプである。(10) の立ち上がりは短く内傾度が強いタイプである。いずれも大谷編年 $4\sim5$ 期の資料である。
- (13) は須恵器高坏の脚部で、透かしを持たず外面にカキメ調整を施す。大谷編年5~6期の資料である。
- (14・15)は須恵器壺の底部で、いずれも平底で外面に14はやや強い回転ナデ、(15)は回転へラ削りを施す。
- $(16\sim22)$ は須恵器甕である。(16) は口径 19.4cmを測り、頸部は外反し口縁部に段を持つ。(17) はやや鋭い端部・段を持ち、口縁内面端部を強くナデている。 $(18\sim22)$ は体部の破片でいずれも外面に叩き目、内面に当て具痕が認められる。
- (23) は弥生時代後期末の甕で、口縁部はゆるやかに外反し、端部を薄く引き出している。草田 編年 5 期の資料である。
- $(24\sim 26)$ は土師器甕である。 $(4\cdot 25)$ はいずれも口縁部にわずかに稜をとどめている。(24) は口径 14.4 cm を測り、口縁部はやや器壁が厚く端部に平坦面を持っている。(25) は口径 17.4 cm を測り、口縁端部を先細り状におさめる。いずれも松山編年 $\Pi \sim \Pi$ 期の資料である。(26) は口径 18 cm を測る単純口縁の甕である。口縁部はゆるやかに外反し、体部は縦方向に刷毛目を施す。
- (27~30)は土師器高坏である。(27)は坏部で、口縁部と坏部の境に段を持ち、坏部は大きく外反している。(28•29)は接合部付近で、風化が激しく判然としないが坏部と脚部を別々に制作し接合したように見受けられる。(28)には脚部内面に絞り目が観察される。松山編年Ⅲ~Ⅳ期の資料である。
 - (31) は土師器(弥生土器)低脚坏で、坏部を欠損し底径5.4cmを測る。
- (32) は土師器鉢で、口縁部端部を外方に屈曲している。口径14.4cmを測る。弥生時代後期~古墳時代前期のものと思われる。

第4節 ま と め

今回の調査は遺跡の極一部の狭い範囲であったが、弥生時代後期の竪穴住居跡と掘立柱建物を数棟検出することができた。以下、今回の調査の結果について簡単に整理してまとめとしたい。

1 竪穴住居跡について

弥生時代後期の竪穴住居跡の平面形は隅丸方形が一般的であるが、隅円多角形プランや円形プランなど平面プランがそれと異なる竪穴住居跡も一定量認められる。今回検出した竪穴住居跡も壁および壁体溝より平面プランが隅円多角形を呈していると考えられる。この平面形の差異は、住居跡の規模に対応していることは従来から指摘されており、山陰地方では鳥取県米子市青木遺跡・安来市塩津丘陵遺跡群の報告で実例をふまえて提示している。

この平面プランが隅丸多角形を呈する竪穴住居跡は、管見では安来平野で16例検出されている。 安来平野においての存続期間は、弥生時代中期の様相がはっきりとしないが弥生時代後期前葉には 確認することができ、後期を通じて作られ古墳時代入ると消滅するものと思われる。

2. 掘立柱建物群について

I区の西側に広がる掘立柱建物群は、丘陵裾部の傾斜の緩やかなほぼ南側に面する場所に平坦面を削りだして建てられている。規模については、全容が判明している建物は検出されていないが柱穴間距離は0.7~2.0mを測り、特に大型のものはないように思われる。

残念ながら遺構内から直接時期を決定できる遺物は出土しなかったが、SB02・03は、付近の地山直上の覆土中から出土した土器がほぼ一定の時期にまとまっていることやこの掘立柱建物と密接な関係が考えられるSK02上面から周辺の地山面と同一レベルから出土した須恵器の年代観から古墳時代後期後半に建てられた可能性が高いように思われる。この想定が的を得ているならばSB01はSK02に切られていることから古墳時代後期後半以前とすることができる。

- 註(1)大谷晃二・清野孝之「安来市毘売塚古墳の再検討」『島根考古学会誌』第13集 1996
 - (2) 松本岩雄「客神社跡古墳について」『ふぃーるど・のーと』№ 5 本庄考古学研究室 1983
 - (3) 足立克己・丹羽野裕『高広遺跡発掘調査報告書-和田団地造成工事に伴う発掘調査-』島根県教育委員会 1984
 - (4) 赤澤秀則『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書 5 南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会 1992
 - (5) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994
 - (6) 計(3)と同じ
 - (7) 松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相ー大東式の再検討ー」『島根考古学会誌』第8集 1991
 - (8) 都出比呂志「竪穴住居の平面形」『日本農耕社会の成立過程』 1989
 - (9) 青木遺跡調査団『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 1978
 - (10) 丹羽野裕ほか『塩津丘陵遺跡群(塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・附亀ノ尾古墳)一般国道 9 号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区IX』島根県教育委員会 1998

報告書妙録

	7									
フリガナ	コシオテイセキ									
	クロイダコバヤシイセキ									
書名	小汐手遺跡									
	黒井田小林遺跡									
副書名	浦ヶ部地区住宅団地造成事業予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 2									
• 巻 次	わらび谷地区土地区画整理事業予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書									
シリーズ名	安来市埋蔵文化財調査報告書									
シリーズ番号	第 28 集									
編著者名	大塚 充。水口晶郎									
編集機関	安来市教育委員会									
所 在 地	〒692-0011 島根県安来市安来町874-20 TEL 0854-22-3927									
発行年月日	西暦1999年3月31日									
アップ ガナ チ 所収遺跡名	所在地 市		٦	•			·			
州以退跡名			市町村	遺跡番号	T I	周査期間	調査面積	責	調査原因	
小沙手遺跡	シスネケンヤスギッ島根県安来市 2017年第17 黒井田町		32206		19	960506 ~	1,500 m²		住宅団地造成	
					19	970326				
プロイグ コバヤシイ セキ 黒井田小林遺跡	シマネケン島根県	* ケンヤス ギ ッ 艮県安来市 32206			19981005 ~		300 m²		1.440元数四方米	
	クロイグチョウ 黒井田町		01100						土地区画整理事業	
所収遺跡名	種 別	主な田	寺代	<u>・</u> 主な遺構	10	主な遺物			—————— 特記事項	
小汐手遺跡	集落跡 旧石器時代		竪穴住居跡							
	弥生時代		代	加工段		削器·弥生土器。 土師器·石器·			弥生時代後期と 古墳時代中期の	
	Africana .	古墳時代			土錘				集落跡	
		弥生時 古墳時				弥生土器 •			弥生時代後期と	
		口垻吋八		掘立柱建物跡		土師器・須恵器		古墳時代後期の 集落跡		
	No.								1/11 m/l.	

小 汐 手 遺 跡

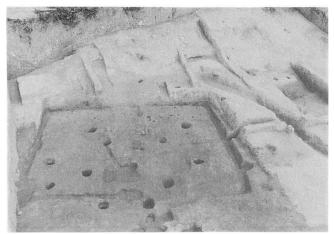
浦ヶ部地区住宅団地造成事業予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2

黒井田小林遺跡

わらび谷地区土地区画整理事業予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

安来市埋蔵文化財調査報告書第28集 1999年3月 発行 安来市教育委員会 印刷 侑 岩田印刷

写 真 図 版



小汐手遺跡 I区 SI01・SD01



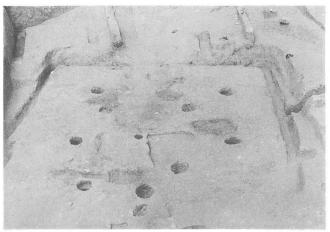
小汐手遺跡 I区 SI02·03



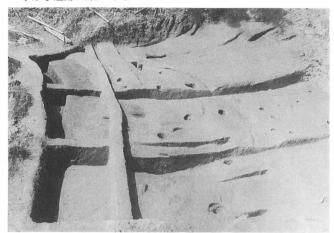
小汐手遺跡 Ⅱ区 SI01~02



小汐手遺跡 II区 SI02



小汐手遺跡 I区 SIO1



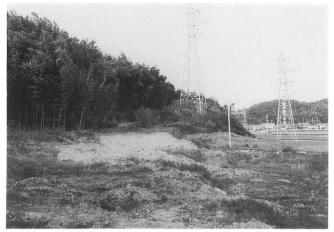
小汐手遺跡 I区 SI02·03



小汐手遺跡 Ⅱ区 SI01



小汐手遺跡 SI03



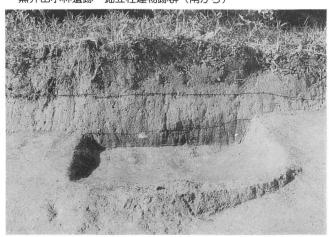
黒井田小林遺跡 調査区遺景(南から)



黒井田小林遺跡 SI01 (北から)



黒井田小林遺跡 掘立柱建物跡群(南から)



黒井田小林遺跡 SK01



黒井田小林遺跡 SI01 (南から)



黒井田小林遺跡 中央PIT遺物出土状況



黒井田小林遺跡 掘立柱建物跡群(西から)



黒井田小林遺跡 SK02